



基礎科学「が」重要

後期の通信では、小論文のテーマとなったり入試の題材となったりしそうな話題、君たちが知っておいた方がよいと思われるテーマなどについても採り上げていこうと思う。読んだら、自分の意見や感想を、ちょっとでもいいから頭に浮かべるようにしてほしい。

今回は本庶先生のノーベル賞受賞で話題になった「基礎科学」。(朝日DIGITAL 1002)

*

ノーベル医学生理学賞の受賞が決まった本庶佑さんは1日夜、朝日新聞東京本社と結んだ電話対談で、iPS細胞の業績で同賞を受けた京都大学教授の山中伸弥さんと喜びを語り合った。

——月並みですが、受賞のご感想は。

本庶 たいへん光栄でうれしいし、こういうことで若い人が元気づけられるということを私はいちばん願っている。それから長い間、いろいろ研究をサポートしてくれた共同研究者とか家族とか、いろんな人にも多少の恩返しができたと感じて、それもうれしく思っています。

——山中さんの感想は。

山中 僕はもうホント、うれしいです。2012年に自分がノーベル賞を受賞させていただいたときよりも今のほうがうれしいと思います。先生のお仕事はもうほんとに、僕たち基礎研究者の何とというか、憧れというか目標ですので。僕たちのiPS細胞は何とというか、言い方はちょっと変ですが、1回の成功で何かいただいちゃったという感想を自分で持っているんですが、本庶先生のご受賞は何十年という着実な、本当に確実な基礎研究の積み重ねがこうやって臨床研究で花開いた。それもちょっとやそっとの花開き方ではなくて、感染症のときのペニシリンに匹敵する、それ以上のご発見ですから。

——92年にPD-1の論文を発表してから本庶さん

を支えてきた原動力は。

本庶 好奇心でしょうね。

山中 その点が僕も一番尊敬申し上げているところで、原動力に基づく基礎研究、1年、5年単位では結果が分からなくても、20年、30年後に花開くのが基礎研究のだいご味ですから。私もまだまだ若いつもりですので、ぜひまたこういうことをやりたいと思っています。

——今後のがん克服に向け、免疫療法の可能性と課題をどう考えますか。

本庶 もうちょっとよく効くようにすることと、効くか効かないかをなるべく早く分かるようにすることです。世界中、これだけ多くの人が参入しているから、僕は時間の問題だと思います。逆に言うと日本の研究者も頑張ってもらって。世界に置いて行かれないよう頑張してほしいと思います。

山中 パラダイムシフトとというか、がんの治療にまったく新しい概念を打ち立てられた。今、世界中の製薬会社がわーっとこの分野に入っていますから。今まで治らなかったがんで、命を失ってた方が治る。そういう時代がどんどん来ているから、今回の受賞は当然だし、もっと早くても良かったというのが正直な感想です。

本庶 ありがとうございます。

——基礎科学も重要ですね。

本庶 基礎科学が、重要なんです。

*

日本ではすぐに結果が期待できる(つまり、儲かる…) 応用科学ばかりに予算がつく状況があるらしい。本庶先生はその問題点を指摘している。何に結びつくか分からないが、知的好奇心を誘ってやまないテーマを追究できる、それが研究本来の姿なのであろう。